

# 発 刊 の 辞

宮 坂 宥 勝

このたび、名古屋大学文学部印度哲学研究室の機関誌が誕生したことは、同慶の至りである。

第二次大戦後、人文科学の急速な発展は各分野の学問研究を大きく変革せしめた。学際という言葉が語るように、隣接科学との連携協力や共同研究の進展などに伴って、各分野の固有の一と思われる一領域は次第にゲートが解消されてゆく傾向にあるといえよう。

もとより個別研究もその分野の拡大化、深化がますます進んでいる。そして、インド学仏教学もその例外でない。インド学ないしインド哲学が意味するところのものも問われるときが来ているといえよう。

こうした学問に対する時代の要請に応えるべく、本誌が自由討究と学問の創造活動の場として活用され、かつ斯学徒の相互親睦のきずなどとして発展することを念願し、粗辞をもって巻頭の言葉としたい。